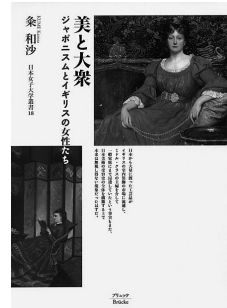


## 書 評

糸和沙著『美と大衆  
——ジャポニズムとイギリスの女性たち』  
(ブリュッケ、2016)

小野 文子



英国におけるジャポニズムについては、これまでの先行研究で示されたように、絵画のようなハイ・アートにとどまることなく、マイナー・アートにおいても顕著に見られ、日本の美術・工芸品はインダストリアル・デザインの黎明期に大きな影響を与えた。それは、例えば1860年代半ばから1930年頃までフランスで人気を博した「セルヴィス・ルソー」や「セルヴィス・ランベール」に見られるように、フランスの陶磁器の様式に浮世絵版画を元絵として転写したものとは大きく違う。<sup>1</sup> 英国におけるジャポニズムは、デザインの改良という、「国家政策」の一部を担っていた要素も持ち合わせていたからである。例えば、クリストファー・ドレッサーが日本からインスピレーションを得て制作した作品は、大量生産を可能にし、西洋の伝統に囚われないシンプルな形であった。こうしたマイナー・アートが意欲的に斬新である一方、絵画作品においては、やや保守的であったと言える一面もある。ヴィクトリア朝の英国で、絵画作品に見られるジャポニズムの特徴は、当時の画壇の潮流であった中世主義、新古典主義、そして唯美主義の中に取り込まれたことである。クリストファー・ウッドは「ヴィクトリア朝の古代への眼差しは、非常に空想的なものであった。彼らは、自分たちよりもずっと素朴で高貴、そしてもっと活気ある黄金時代として悲哀と共に過去を振り返った。彼らの美術は、醜さ、そして彼ら自身の時代の物質主義と工業主義から逃れたいという願望を表している」と述べて、<sup>2</sup> ヴィクトリア朝の人々は、彼らが生きている醜悪な物質文明から逃れ、遠い過去に理想郷を求めたことを指摘したが、彼らは未知の国である日本に対しても、同じような幻想を抱いた。

さて、『美と大衆 ジャポニスムとイギリスの女性たち』は、こうした先行研究を踏まえつつ、ジェンダーという視点から、一般大衆、特にミドル・クラスの主婦たちへのジャポニスムの浸透について明らかにしたものである。第1章「イギリスにおける日本美術のコレクション形成」では、ジャポニスムの背景として、英国における日本美術のコレクションの形成について、大英博物館、およびジェームズ・ロード・ボウズのコレクションを中心に論じている。糸氏は、大英博物館に収蔵されたオーガスタス・ウォラントン・フランクスやウィリアム・アンダーソンの日本美術コレクションをパブリック・コレクションの代表と位置付け、「日本という未知の国の物品を組織的に構成することは、国家の威信をかけた問題」であったとし、クレイグ・クルーナスの先行研究を引用しつつ、こうした体系的な収集と分類は、「男性の役割」であったとしている。一方で、リヴァプールの初代日本名誉領事を務め、自宅に日本美術館を創設した、ジェームズ・ロード・ボウズによるコレクションを、個人コレクションを代表するものとし、大英博物館のコレクションと比較しながら、いずれも体系的なコレクションを築こうとする姿勢は男性主義的、としている。第2章では、「唯美主義と日本——芸術的付加価値の形成」として、1860年代というジャポニスムの初期の段階において、浮世絵などの日本の美術作品に影響を受けたジャポニスムの作家たち、つまりダンテ・ゲイブリエル・ロセッティやジェームズ・マクニール・ホイッスラーたちが日本の品々を購入して自邸に飾り、こうした「芸術家」たちの室内装飾が1880年代以降に出版された家事指南書において紹介され、ミドル・クラスの主婦層の絶大な支持を得たことが、ジャポニスムに「付加価値」を与えたという。そして、ジャポニスムが大衆に「趣味」として受容されるには、こうした「芸術界のエリートたち」が日本趣味の室内装飾を実践していたからであり、このことは、オスカー・ワイルドの言説の通り、「洗練された美を提供する国としての日本のイメージ」につながった。さらにそのプロットとして重要な装置であったものの一つが、屏風であったと指摘している。すでに先行研究で指摘されてきたように、唯美主義の絵画作品の中で、画面の美的効果を高めるために、日本の華やかな金屏風や花鳥画が描かれた屏風が描き込まれたのである。こうした作品が家事指南書や雑誌で紹介されたことが、「良き趣味」の記号とし

て機能したと結論付けている。

第3章「産業見本としての日本」では、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公を中心に産業デザインの向上が推奨され、日本の美術・工芸品が優れた例として収集されたことについて、歴史的背景としてまとめつつ、唯美主義の芸術家たちによって見出されたジャポニズムが、産業デザインの分野において「良き趣味」として参照されたことを概観している。さらに、「見本」とされた日本の美術・工芸品が実際にイギリスの産業製品に影響を与えた例として、ルイス・フォアマン・デイの壁紙とロイヤル・ウースター社の陶磁器の製品に、日本の意匠が装飾モチーフとして用いられたことについて、具体的に例証している。本章で特に着目すべき点は、金唐革紙を例として、日本の意匠だけでなく、技術の摂取についても論じられていることである。これまでのジャポニズム研究では、造形的特質や意匠の影響を指摘するにとどまる傾向にあった。本書において、英国において安価に流通させるために技術の摂取を試みたことが、ジャポニズムの流行がより多くの階層に消費文化として普及した一つの要因として論じられていることは、大変興味深い。

第4章「大衆消費社会における日本受容——日本趣味の供給と需要」では、家庭内におけるジェンダー的な役割に注目し、ミドル・クラスの主婦層が関心を寄せた室内装飾に日本趣味が広まり、英国の消費文化の中に日本の美術品や工芸品が取り入れられ、浸透していく様を明らかにしている。特に、日本の美術工芸品の「大衆化」の実態として、当時出版された女性誌に掲載されたジャポニズムの室内装飾の例を紹介している。本章の興味深い点は、日本の開国、横浜港の開港を商機ととらえ、日本の品々を本国に輸送したイギリス系の商社、ロンドス商会、ドレッサー&ホーム商会、マリアンズ商会の活動を概観し、商社が活発に市場に参入することにより、日本の美術工芸品のより幅広い階層への流通を可能にしたことを明らかにしている。こうした活動は、ミドル・クラスの主婦たちが、店頭で気軽に日本の品物を購入することを可能にしたのである。

以上が本書の概要であるが、桑氏は、ヴィクトリア朝の英国における日本美術コレクションの形成、デザイン改良運動における日本の美術工芸品の「見本」としての役割、唯美主義において前衛と言われた芸術家たちの

「エリート層」における日本趣味の流行など、英国におけるジャポニスムの流行についての先行研究を丁寧に参照し、本書の中心の議論の背景としている。そして、これまでのジャポニスム研究ではジェンダー的な視点が欠如していたとし、社会や家庭における男女のそれぞれの性差による役割分担に着目し、英国におけるジャポニスムの広がりについて論じている。糸氏は、日本美術受容の基礎となる博物館の日本美術コレクションを男性が形成し、唯美主義の男性芸術家やパトロンたちが日本の品物を「良き趣味」として室内装飾に用い、そして男性デザイナーたちが「モダン・デザイン」創出のために、自分たちの作品に日本の造形表現を受容した、と指摘している。こうして、男性社会によって良き趣味として醸成されたジャポニスムが、ミドル・クラスの女性たちの間で受け入れられることになった、と糸氏は説く。つまり、これまでの英国のジャポニスムに関する研究を概観し、「男性的領域に根差したものを」公的なものとし、家庭のような「私的空間を女性的なもの」と位置付け、男性＝公的から女性＝私的・大衆へ、というのが本書の論の流れである。

本書の構成をより明確にし、糸氏の議論に説得力を持たせるには、まずは、ヴィクトリア朝の社会における「ミドル・クラス」についての定義、位置づけ、文化的アイデンティティーや、彼らの生活習慣について、明らかにするべきであろう。本書の議論は、ヴィクトリア朝の社会や文化を語るために避けることのできない「ミドル・クラス」に着目しているものの、その中身についての吟味がなされていない。「ミドル・クラス」は、かなり複雑に構成された、貴族階級でもなく、労働者階級でもない、多くの人々のことを指すのである。そして、同じ「ミドル・クラス」とは言っても、「アッパー・ミドル」と「ロウアー・ミドル」では、一方は上流階級に準じる階層であり、もう一方は極めて労働者階級に近い。

「一般論として」、女性誌を中心に良い趣味の手本として、日本、あるいは東洋の品物が紹介され、家庭の装飾を担っていた主婦層が、彼女たちが使うことを許された金額の範囲で購入することができるレベルの、安価な品物の購買層であったことは、すでに周知である。本書は、ジェンダーと階級社会という二つの視点で英国のジャポニスムを明らかにしようという、極めて重要で新しい視点であるにもかかわらず、議論の中心となるこの二

点についての吟味がなされていないことから、著者の立ち位置が読者に明確に伝わってこない。結果として、男性＝公的から女性＝私的・大衆へ、つまり、ミドル・クラス＝大衆＝女性、という単純な論の展開となった印象を受ける。ジェンダーという視点を軸に、英国の複雑な階級社会、ヴィクトリア朝における階級社会の変化、ミドル・クラスの台頭、ミドル・クラスの多様性を分析し、日本の美術や工芸品が各階級によってどのように受け入れられ、糸氏が指摘する「ミドル・クラス的女性＝大衆化」に至ったのか、さらに踏み込んだ議論がなされることを今後期待したい。

注

- 1 東京国立博物館・日本経済新聞社編『フランスが夢見た日本——陶器に写した北斎、広重』、日本経済新聞社、2008年
- 2 Christopher Wood, *Olympian Dreamers. Victorian Classical Painters 1860-1914*, London: Constable, 1983, p. 17.

——信州大学准教授